

第6回中国・韓国・日本気象学会共催国際会議の報告

2013年10月24日～25日の日程で、標記会議が中国の南京信息工程大学 (Nanjing University of Information Science and Technology) で開催された。この会議は、2005年に日本気象学会春季大会に併せて開催されて以来、日中韓3国の持ち回りで実施されてきており、今回が2巡目の最後となる中国での開催であった。参加者は中国から95名、韓国から15名、日本から19名ほどであった。

会議は、24日午前の総合会議から始まり、中国気象学会副会長の Renhe Zhang 教授、韓国気象学会会長の Soonchang Yoon 教授、日本気象学会理事長の新野宏教授の挨拶があった。続いて3件の招待講演が行われ、最初に中国気象学会の Zhang 教授が Impact of Indian summer monsoon on the South Asian High and its influence on summer rainfall over China と題した講演を、続いて韓国気象学会の Yoon 教授が Long term observation of aerosol radiative forcing in east Asia と題した講演を行った。いずれも、3国の気象関係者にとって関心の高い話題で、活発な質疑が行われた。最後に、日本気象学会から長谷部が Transport processes in the Tropical Tropopause Layer and their role in climate と題した講演を行った。

続いて、2会場に分かれて一般セッションが行われた。開催されたセッションは、Mechanism and Numerical Prediction of Severe Weather, Simulation and Prediction of Regional and Global Climate, Atmosphere-Ocean-Land Interaction, Middle-Upper Atmospheric Processes and the Stratosphere and Troposphere Interaction, Extreme Weather and Climate Events, Climate Change and its Impacts, Composition and Chemistry of the Atmosphere, Atmospheric Remote Sensing and Atmosphere Physics, Data Assimilation and Numerical Model Development の9つであった。各セッションは、各学会から原則1名、計3名のコンピーナにより準備されたが、日韓のコンピーナには自国参加者の講演要旨のみが配布され、プログラム編集は中国気象学会に任される形となった。日本気象学会からのセッションコンピーナは、上記セッション順に、斉藤和雄 (気象研究所)、尾瀬智昭 (気象研究所)、谷本陽一 (北海道大

学)、長谷部文雄 (北海道大学)、梶川義幸 (理化学研究所)、高藪 出 (気象研究所)、五十嵐康人 (気象研究所)、中島 孝 (東海大学) と河本和明 (長崎大学)、露木 義 (気象研究所) の各氏 (敬称略) であった。

会議の初日に行われたレセプション後に、3学会の代表者2-3人ずつが集まり、今後の合同学会の進め方について議論した。日本気象学会からは、より広範な地域における気象学の発展に貢献することを視野に合同学会のうち科学的討論に関する部分を Asia Oceania Geosciences Society (AOGS) Meeting に移行することと3国間連携維持のための実務者会議を AOGS と並行して開催することを事前に提案していたが、中国と韓国は3国の名を冠した学会の維持を重要視しており、会議では合意に至らなかった。議論の結果合意されたのは以下の4点である。

- (1) 3国の連携を維持することは重要である。
- (2) 3国合同気象学会の将来構想に関する明確なビジョンをもつ必要がある。
- (3) AOGS2014の際に3国の気象学会は代表者を派遣し、同様の実務者会議をもって議論を続ける。
- (4) 3国に特に関連の深いテーマをこれまでより限定した数選択し、その専門家の会合という形で日中韓合同気象学会を継続する、という案について検討する。

なお、後日開催された日本気象学会理事会で、上記(4)の案は了承された。

AOGS2014は、2014年7月28日から8月1日まで札幌で開催される予定である。日中韓合同気象学会の将来は、その際に開催される実務者会議で決定されるはずであるが、上記(4)の方針が確定すれば、次回は2015年に日本で開催することになる。実施方法などについては国際学術交流委員会で議論を進めているが、今回、参加の多かった気象研の方に同委員会のメンバーに加わって頂き、テーマ選定などの議論に参加して頂くことを検討している。最後に、今回の会議でコンピーナをお引き受け頂いた方々に謝意を記すとともに、東アジアでの大気科学分野の学術発展のためにこの会議が果たすべき役割などについて、会員の皆様からの積極的なご意見を頂くことを期待している。

(理事長：新野 宏)

(国際学術交流委員長：長谷部文雄)